

(……どうして、私だけなんだろう)

夜11時。消灯時間を過ぎた合宿所を抜け出し、私は一人で夜のプールへと向かっていた。

昼間の練習の後、活志コーチに「あとでプールに来い。お前の弱点を治すための特別な練習を考えてやる」と、低く落ち着いた声で言われたからだ。

鬼塚活志コーチは、20代後半の若さで大学の専属コーチを務める、元トップスイマーだ。現役時代に鍛え上げられた無駄のない身体と、彫りの深い整った顔立ち。部員たちの間では「厳しいけれど、すごくイケメン」だと密かに憧れの的になっている人だった。

タイムが伸びなくて悩んでいた私にとって、彼からの呼び出しはチャンスだった。

(もうコーチいるかな……?)

重い扉を開けると、そこにはプールの匂いと、静かな水面があった。

暗いプールの端、監視員席の横に立っていたのは、活志コーチだ。逆光の中に浮かび上がる彼の高い鼻筋や、鋭くも美しい瞳が、いつも以上に大人びて見えて目を奪われる。

「来たか」

「……は、はい」

「お前、自分の最近のタイムをどう思っている」

「あの、最近の、タイム……ですか」

「そうだ。ここ一ヶ月の記録をすべて洗い直した。……お前のタイムは、全く伸びていない。それどころか、コンマ数秒単位で停滞し始めている」

——ぎくり、とした。

心臓を直接掴まれたような衝撃に、言葉が詰まる。

(やっぱり、気づかれてたんだ……)

「……はい。あの、でも自分でも、どうしていいか

わからなくて……」

私は俯き、自分の足元を見つめることしかできなかった。

活志コーチが一步、また一步と私との距離を詰めてくる。トレーニングシューズが床を鳴らす乾いた音が響き、目の前に、彼の大きな影が重なる。

「お前は水の扱いをわかっていない。ただがむしゃらに掻いているだけだ。そんな泳ぎを続けていても、この先何度飛び込んでも結果は同じだぞ」

「そ、そんなっ」

活志コーチの手が、私の顎を強引に持ち上げた。

「お前は、もっと上手になりたいか？」

「な、なりたい、です！」

「そうか……。なら特別に私がマンツーマンで特別

指導をしてやろう」

「本当ですか！」

思わず、声を弾ませてしまった。

活志コーチにマンツーマンで指導してもらえるなんて、部員なら誰もが夢見るような幸運だ。誰よりも水泳を理解しているコーチが、私のためだけに時間を割いてくれる。

(……私だけ。私だけを、活志コーチが見てくれるんだ)

胸の奥が、期待と高揚感で熱くなった。この人に教われれば、絶対に速くなれるはずだ。

「まず、服を脱げ」

「……え？」

「あ、あの、今、なんて……？」

「聞こえなかったのか。すべて脱げと言っているんだ」

一瞬、耳を疑った。聞き間違いかと思ったけれど、活志コーチの瞳は少しも笑っていない。

「脱げと言っている。全部だ。一糸纏わぬ姿になれ」

「え、で、でも……」

(それって、ここで裸になれってこと?)

顔がカッと熱くなる。

混乱と恥ずかしさで、思わず自分の体を抱きしめるように腕を組んだ。いくら二人きりとはいえ、コーチの前で裸になるなんて、そんなの恥ずかしすぎる。

「水泳において重要なのは、『水に逆らわない身体』を作ることだ。……だが、お前の泳ぎは力みが強すぎる。常に筋肉が緊張していて、水を押し返そうとしている」

「そ、それは……」

「どの瞬間に肩へ力が入り、どこで呼吸が乱れ、どこで水の抵抗を逃がせていないのか。それを正確に

把握して矯正するには、余計な感覚を全部排除する必要がある」

彼の鋭い視線に見つめられていると、恥ずかしがっている自分の方が、スポーツに対して不真面目で、卑猥なことを考えているのではないかという錯覚に陥りそうになる。でも、

「あの……やっぱり、裸になるのは、ちょっと……」

私が戸惑い、足踏みを続けていると、活志コーチはふっと鼻で笑い、顎の先を出口の方へ向けた。

「……そうか。ならいい。せっかく特別に時間を割いてやろうと思ったが、お前にはその程度の覚悟しかなかったということだ。……残念だ」

活志コーチがすっと離れていく。

(あ……待って。行かないで……！)

その瞬間、猛烈な焦燥感が私を襲った。

「ま、待ってください！ 活志コーチ！」

私は、背中を向けた活志コーチに向かって叫んでいた。

「脱ぎます！ 今、すぐ脱ぎますから……！」

震える指先がジャージのファスナーを捉え、ゆっくりと下ろしていく。ジ、ジーという無機質な音が、静まり返ったプールサイドに不気味なほど大きく響いた。

（本当に脱ぐんだ……。私、活志コーチの前で、本当に……）

ジャージを肩から滑り落とすと、夜のプールのひんやりとした空気が、露出した肩や腕にまとわりついた。続けて、着ていたTシャツの裾を掴む。それ

を脱げば、あとは下着だけになってしまう。

「……手が止まっているぞ」

活志コーチの冷徹な声が、私の焦燥を煽る。彼は一步も動かさず、腕を組んだまま、私の挙動を隅々まで観察していた。

「す、すみません……っ」

私は意を決してTシャツとズボンを一気に脱ぎ捨てた。スポーツブラとショーツだけになると、目の前に立つ活志コーチの視線が、肌に突き刺さるのを感じた。

いつも水着で同じくらい肌を晒してはいるけれど、下着姿は水着の何倍も恥ずかしく感じた。

(恥ずかしい……っ)

「次は下着だ」

「は、はい……」